



腹部の脂肪量を測るアケシュさん（中央）

弘大でフイジー医師らQOL健診視察

## 国民健康へヒント得る

### 「楽しんで測定」に好感

オセアニアの島国フイジーの行政機関職員ら10人が23日、弘前市在府町の弘前大学大学院医学研究科健康未来イノベーション研究機構で、啓発型健診のQOL健診を視察した。フイジーでも健康課題とされる生活習慣病対策に取り組む国際協力機構（JICA）の事業の一環で、職員らは脚力

や野菜摂取量、腹部の脂肪量などを測定する様子を見学。課題解決のためにヒントを得ていた。

フイジーは国民の50%以上が肥満で、生活習慣病の増加が問題となっているが、健康づくりのための行動変容へのアプローチに苦慮しているという。

この日は同市の医療機器

などを販売・管理する会社の社員が健診を受けており、野菜の推定摂取量の測定器「ベジチェック」や、運動機能の低下を示すロコモティブシンドロームに関する歩幅の測定などを見学し、測定項目によっては体験もした。

今回のJICA事業は、弘前大が開発したQOL健診について、結果をすぐに返却して健康教育を行い行動変容につなげる点に注目。医師のナラヤン・アケシュさん(45)は「フイジーでは使っていない医療機器

があったし、地域の方がスタッフとして手伝っているのが素晴らしい。楽しんで測定しているところがフイジーの健診とは違う」と述べ「ロコモの診断とベジチェックはぜひ取り入れたい。肥満対策も重要」と話した。

健診の開発・普及を主導する同研究科の中路重之特任教授は「フイジーの国民は県民よりも短命であり、抱えている課題は同じ。何よりもQOL健診は楽しんでできることを広めたい」と語った。（石田紅子）